



2011 SAIL おおつ 運営



BYC CUP

ヨット人生の転機

水上 真吾



1997 年に BYC に入会させていただいて 15 年が経ちました。

青木さんからの誘いで、当時のレーザー乗りが 18 人加入しました。これが私のヨット人生の転機だったと感じています。

私のヨットとの出会いは、高校一年でした。私は香川県高松市の生まれです。当時の高松は、4 つの高校の艇庫が並び、毎日放課後 20 艇以上が出艇し自由にヨットレースを楽しんでいました。先生は陸勤です。私は当時痩せていたので、FJ に乗っていました。

毎年、全日本優勝者が出ていました。私は、ヨットの推薦入学で同志社大学に進み、ここでは 470 に乗りました。三回生の時には、学生枠でロスアンジェルス五輪の強化選手にも選ばれましたが、インカレでは予選落ちし、初めての大きな挫折を味わいました。

社会人になってからは、レーザー、シーホッパーと乗り継ぎ国体を目指しました。残念ながら福岡国体で 7 位。長女も授かり、現役セーラーとしては一区切りとなりました。

シーホッパーを処分することもできず、置き場所を捜していたところ青木さんからのお声がかかり、入会をお願いしたのが直接の動機です。

次女も生まれ四人家族で、ちょくちょくびわ湖に出かけました。ヨットを「競い合う道具」と考えていた自分の偏った視野をこじ開けてくれたのが、BYC のオープンでアカデミックな雰囲気でした。その後、京都府セーリ

ング連盟からの依頼で、京都府宮津高校のコーチを 3 年務めました。とても有意義な経験でした。ヨットがもつ「人を育てる可能性」に気付かされました。

また、同志社大学の学生だった吉本善太さんをルーツとする同大ヨット部の歴史は、BYC80 年誌のなかで知りました。ここ 6 年ほどは、私自身、同大ヨット部の OBOG 会「鯨会」の運営委員長として多忙となっています。BYC の正会員なのですが、出張（外勤）が多い私です。2009 年には英国オックスフォード大学ヨット部が来日し、同大と交流戦を行いました。その際には夕風をお借りして、北湖へ周航に出かけました。その時の写真を掲載します。

先ほども触れましたが、ヨットというスポーツがもつ「人を育てる可能性」の大きさは絶大です。「知」「徳」「体」が問われる生涯学習だと感じています。これは国際交流でも有効であることは周知の事実です。

なかなか叶いませんが、そろそろ陸勤（外勤）を終えて、BYC でセーリングを楽しみたいと思っています。

以上



出発前



沖ノ島をバックに帰りも曳航



栈橋スイミング



BSC 記念写真 (筆者向かって前列右端)

ありがとう EZ

森 勝彦



BYC には素晴らしい歴史があります。その中でも先輩方の残してくれた EZ、この船が遠くヨーロッパのセーリングクラブと BYC を結ぶきっかけとなった事件は大変興味深い出来事だったと思います。私はオーストリアでのレースのお誘いを受け、ヨーロッパに行くのも初めての経験だった私にとって、又とない良い経験を得ることができました。先人達の行動の末にこんな機会がめぐってきた事を想うととても不思議なめぐりあわせだなと感じ、先輩方に感謝の気持ちで一杯であります。

オーストリアでは私はオリンピアヨレと言うベルリンオリンピック（1936 年）採用艇で当時のオリジナルモデルの一人乗りのディンギーを借り受けて乗艇する事となりました。

木造艇の美しさ、艀装のシンプルさ、操縦安定性、艇のコンディションなど、どれをとっても現代 FRP 艇と遜色ない事に驚きました。レース中は沈艇も出るかなり強風の場面もありましたが、スナイプの 2 倍ぐらいあるセンターのおかげで艇の安定性がよく全く怖さを感じる事はありませんでした。ベルリンオリンピックに出た選手に思いを馳せながらいまだ現役であるヨレのティラーを握りました。

このクラシックヨットの大会には数多くの木造艇が集まっていました。どんなに大きな船でも自家用車にトレーラーで遠征に来ているところは日本と文化の違いを感じました。

最古は船齢 100 歳を越える艇から、大きな艇では 40 フィートは越えるであろう艇まで、どれも美術品のように美しく手入れされている船ばかりでした。その中に EZ と同じ形の艇もありました。ヨーロッパには木造艇を大切に守り続ける文化があると感心しました。いつの日か琵琶湖の EZ がオーストリアに浮かぶ日が来れば面白いなと思いました。

文化の違いは他にも垣間見ることができました。酒飲みにはたまらない大人の社交場であるお洒落なクラブハウスでは、生演奏聞きながらビール飲んでソーセージを食べられたのが一番の幸せでした。BYC のクラブハウスもこうなってくれたら最高と言う感じです。またフォーマルな席での民族衣装は重厚な建物とマッチしていて大変良かったです。法的な規制があるにせよ古い物を守り続けると言うことは至って普通と言う印象を受けました。

柳ヶ崎周辺はいまだ開発優先で軽薄な建造物群が湖岸を埋め尽くしています。大昔、田圃と畑の原野だったところは一昔前、遊園地であり今は高層マンションが建ち並び、風が命のセーラーにとってはひどい環境悪化になってしまいました。県営ハーバーは政治に翻弄され利用者の事よりも採算性ばかりを問題視し、マンション住民からは騒音の苦情を受け、また、犬の散歩コースになり、魚釣り場となり、釣り人の残した釣り針で怪我をする。県の施設は県民にオープンであるべきとの姿勢のあらわれでしょうか、今はこれも時代の流れと受け入れるしかありません。

景観や時代は変われどいつまでも先輩方から引き継いだ BYC の心意気、オープンでフレンドリーな居心地の良さを失いたくはないと感じています。



オーストリア・クラシック・セイル・ウィーク 2010年

私とB Y Cメンバー達と 「オバマ（バミューダ）トライアングル」

大西 貞安



2005年の8月の盆前、敦賀から淡路島へユングフラウ（北前）を廻航するのに敦賀から、鬼太郎の妖怪が跳梁する境港まで廻航に参加した。

夏の日本海は、満天の星空の下で最高のクルーズが楽しめる誘われ参加したのだが、この時の夏は異常気象で、停滞前線が日本海沿いにあり出発の日はどうも曇っていた。

西之園氏、信田氏と僕の3人で12日に出帆した。帆を出していたかは定かでない。小浜湾に入ってすぐ西の湾内に停泊した。家の無い道路沿いの岸壁に係留していた台船に舫った。

運良く信田氏の友人が近くの（今話題の）大飯原発に仕事に来ていたので、小浜の町で夕飯を食べ、風呂に行くこともできた。

翌13日、早朝に出帆した。小浜湾から日本海への出口で雨が強くなり、土砂降り、雷のゴロゴロの音と同時にまわりがピカッと明るくなる。天気によければ小浜湾の出口であるので、岸も見えて方向もわかるが雨で周りにはなにも見えない。

パイロットハウスのヨットであるので船の中で舵を取ることにした。船の前方の窓からは近くの水面のみが見え、その先は真っ白で土砂降り、舵は波に対して同じ角度にとればよいと聞いていたので自分ではそのつもりにしていたが、急にコンパスがクルクル回りだした。

コンパスが狂った・・・周りに鉄気の物は・・・ない・・・信田氏だけ・・・まわりの空は真っ白で雷の音と共に、周りが一瞬ピカッと光る。映画の一場面に出てくるバミューダトライアングルが頭によぎり、頭の中が真っ白になった時、冷静な信田氏が「ティラーの切りすぎで同じところを回っているだけやん。」と指摘された。

横の窓から海面をみると、なるほど航跡が輪を描いていた。

この時の航跡は2つの円としてGPS記録に残っていた。僕は前ばかりを見ていたためわからなかったが、それから舵輪を持つのは雨でも外で持つことにした。バミューダトライアングルとはこの事態が空中で起こった

のかなと思った。

10時頃、伊根の港へ入り、ここで青木氏と本田氏と食糧と燃料を積み込み、夏の岩牡蠣に当たった本田氏の家族と西之園氏の航友である「北山」の船長氏の見送りを受け、いざ西に向かった。

天気はあいかわらず悪かったが経が岬を回り久美浜の沖で日が暮れ、天気は良くなって来た。しかしエンジンの調子は悪くなり、帆走のみとなった。バシヤンと船の舳先が波を打つと、キラキラと夜光虫が輝いた。夜光虫の灯は蛍ぐらいたらと思うていたが線香花火の灯より明るくまた海面広く光るので驚いた。

ナホトカ号を越前岬へと運んだ日本海流と向かい風の為、タックを繰り返すたび同じ久美浜の夜景が同じ方向に見えた。

僕は寝た。一晩中、久美浜沖を間切っていた。

翌14日の朝になるとエンジンが治って西へ進んでいた。天気は良くデッキの上で時々スプレーを浴びながら青木氏はパソコンを打ちメールを送っていた。岸边に近い為電波が届くとのことであった。銀色の飛魚がヨットの前から飛び出しまさぐら前方へ飛んで行く様はまるでヨットが機銃掃射しているようであった。

夕方16時頃、鳥取の大砂丘がみえる白兔海岸沖をすすんだ。

波の山脈の尾根を西へ走ってきたが遂にタックをして遠くの美保関へむかわなくてはならない。雨はなかったが波高は2メートルくらいあった。

波に直角になったとたんヨットは舳先を波の谷底へ向けて滑り込み、海に突っ込む構えを見せた。

「波に突っ込むぞ！」という叫び声が上がった。が次の瞬間ヨットの舳先は波に突っ込まずグーッと持ち上がり空が目の前に、そしてまた波底へ突っ込んで行った。これの繰り返しで遊園地のバイキングさながら進んでいた。

再びタックして真っ暗闇の波の尾根筋をエンジンの助けと共に6ノットでザブザブスプレーを浴びながら走っていた。ヨットには自動車のようなヘッドライトはな



敦賀出航 2005/8/12



伊根港にて 2005/8/13

いが懐中電灯はあった。

信田氏が「懐中電灯でセイルのテルテルだけを照らしてくれ。」と、それで美保関燈台の明かりをめざしていった。

最初、水平線に光が見えたり見えなくなったりであったので、波で町の灯が消えるのか思ったが規則正しく12秒で光が見えたので美保関燈台と確信した。美保関燈台は、山の上にあったが今回は水平線ぎりぎりに見えた。この燈が境港に近づくにつれ水平線より高くなって行った。

ヨットの前方は漆黒の海で海岸線の処に町の灯がみえるのみであった。流木があったらどうなるかと不安でいっぱいであったし、座っていたものの塩のスプレーで尻がビショビショ、しかも尻ずれができたみたいで、因幡の白兎と同じく塩水が沁みて痛く、やや中腰で早く港へ着かんかなとの気持ちばかりで、テルテルを照らしていた。

美保湾に23時頃入った。波も風も治まり、エンジンで境港をめざした。鬼太郎の妖気渦巻く境港である。海上に丸い数階建ての家が見える。1軒のみならず何軒も、いずれも提灯を窓に多数ぶら下げ、しかも下より上に行くほど大きくなる。（千と千尋の映画に出てくる町の様にも似ている）他の人は何も言わないので僕も聞きにくい。不気味だ、さすが鬼太郎の境港だ。

ヨットが進んで行くにつれ家は大きい丸いビルディングに見えてきた。そして提灯の灯は揺れている。初めて見る建物だ。

妖怪の正体がわかった。大きい船のお尻であった。風下から進んで行ったため停泊している船はすべてお尻を向けていたのだ。提灯は船の各階に多数つけられている海賊よけの大きな裸電灯であった。

深夜の0時に境港のヨットハーバーに着いた。ハーバーでは今日着くと連絡していたので電気をつけて待っていてくれた。

ここで「シンシア」で西回りして来ていた小城さんと再会した。

翌15日の朝、仕事がある僕だけ帰ったが、米子の駅に着いたら猛烈な夕立（朝だが）になり雷がピカッ、ゴロゴロと鳴っていた。

あとで聞くとこの後天気がよく満天の星のもと、これぞ夏のクルーズであったとのこと。やはり僕は雨男だったのか。

「今回のセイリングはこれから外洋ヨットを始める人には又とない良い経験になったのではないか。」と西之園氏のコメントがあったがそのとおりであった。

僕のお尻の皮は3か所ほど破れて大きいサビオを1週間ほど貼っていた。血が染み出てくるのでしばらくはパンツ2枚はいていた。

後で聞いたところ、他の人達のお尻の皮はなんともなく、洲本までクルーズを楽しんだとのこと、ヨット経験の浅さが身に沁みたクルーズであった。

★ 祝 琵琶湖ヨット倶楽部 90 周年 ★ レーザーフリート漂流記

中村 学



○ヨットとの出会い

1964年、小学4年生の夏、三重県英虞湾にある多徳島のアサヒキャンプセンターでA級ディンギーに乗せてもらったのがヨットとの出会いである。

それから10年、大学生になっていた私は、ふとしたきっかけで大阪府淡輪の青少年海洋センターでボランティアリーダーとして活動することとなり、再びヨットと巡り会った。

海洋センターは、ヨットやカッター等の海の活動を通して青少年を育成する教育施設であり、ヨットプログラムとしては、OP、Y-15、Y-13、420を使用し、施設利用者にレクリエーションとしてのヨットを指導するというものであった。ちなみに、蜂須賀ひろみちゃんともこの施設の利用者として出会い、以後、長い付き合いになっている。

しかし、このとき、私自身、以後長くヨットと関わる生活を送るようになるとは思ってもよらなかった。



○赴任地は紀伊田辺。田辺フリートへ

きっかけは就職時の勤務地にあった。建設省（現、国土交通省）に入省し、和歌山県の紀伊田辺に赴任したが、なじみのない土地でヨットハーバーを見つけ、ぶらついていると声を掛けてくれたのが、レーザー田辺フリートキャプテンの谷口次朗さんであった。私を見つけ、「ヨットやるんか？レーザーせえへんか」、いきなり聞かれて思わず「お願いします」となってしまった。車もないのに最初のボーナスで買ったのが中古のレーザー、セール番号36339、琵琶湖にあったものを谷口さんの手配でデリバリーしてもらった。BYC関係者でこのNO.に心当たりのある方はおられないだろうか。

谷口さんには、関西選手権、全日本選手権と連れ回してもらった。



ひねもすレガッタ

ちなみに田辺フリートは、日本ナショナルトラスト運動の象徴である天神崎のつけねのヨットハーバーをベースにしている。きれいな海と海岸線、ヨット環境としてはすばらしい海面をもち、西日本随一のフリートだと思っている。

魚の仲買をしている谷口さんは、今でもときどきかつおを送ってくれるし、鉄工所経営の堀部さんは南高梅を送ってくれる。

希望とは裏腹に、紀伊田辺での勤務は2年間でおわり、神戸への転勤となった。最後の週末に、夕日の映える田辺湾で最後のセーリングを楽しんだのはよき記憶である。

○西宮フリートへ

神戸に転勤となった私は、西宮フリートに移籍した。案の定、とんでもない海の色とにおいでであった。これは絶対「海」ではない。しかも極楽会という異様な集団がある。これは巻き込まれてはいけなさと本能的に感じた。

この翌年結婚し、私が海に出ている間、妻はこぎたないフリートハウスで待つ日々となり、今でも嫌みを言われる。妻は海洋センターでの後輩であるが、どうもヨットが嫌いになったらしい。各地への遠征にも帯同してくれたが、楽しくなかったと意地を張っている。そうは見えなかったけど・・・。

結婚のどさくさに紛れて新艇を手に入れた。進水した日にフリートレースがあり、1位は琵琶湖から遠征に来ていた青木（英明）さんで私は2位だったと記憶している。彼は覚えているかわからないが、このときが青木さんとの出会いであった。西宮フリートには7年いたと思う。私が出た後、1～2年後、伝説の西宮フリートは消滅したと聞いた。極楽会は今も密かに息づいているとの噂を聞く。私のメールにも悪魔の囁きが届く。

○万葉の海、和歌浦フリートへ

次の移籍先は和歌浦フリート、和歌山市内への転勤に伴うものであった。紀伊田辺と趣は異なるが、万葉の海、和歌浦湾を海面にセーリングが楽しめること



和歌浦全日本（西宮Fメンバーと）

ろだ。当時はワールド常連の岩出彰くんや後に全日本チャンピオンになった水落くんらがいて、よい練習ができた。2年目に全日本選手権が和歌浦湾で開催され、満を持して臨んだが、前日までと違って変わった北からの振れのある強風に翻弄され残念な結果となった。

翌年滋賀県への転勤となったが、もう数年和歌浦湾でセーリングをしたかったと思う。

和歌山では次女が誕生。妻は、二人の子供を海岸で遊ばせる日々が続く、楽しそうだった。口が裂けてもそうは言わないが。

○琵琶湖、柳が崎フリーストへ

平成2年、滋賀県大津市への転勤で守山に住むことになった。柳が崎フリーストへの電撃移籍である。琵琶湖の不規則な風の振れとチョッピーな波、あるいは上から打ち下ろすような比叡下ろし、冬場の湖水の冷たさ、いずれも私にはなかなかなじめないものであった。和歌山の冬の海水は温かいが、琵琶湖は水のように冷たい。そんな言い訳だが、レーザーはフリーストを楽しむ程度で、遠征から遠ざかった。

平成4年、ヨットから遠ざかる契機が訪れた。山小屋を建てた。バブル期であり、地価の高い京阪神に家を持つことはできない、それなら田舎に家を持とう・・・、ここまでは妻と意見が一致したが、私は海に、妻は山に



和歌浦Fの面々(宮津にて)

と意見が分かれた。そしてヨットでの悪行の数々を並べられ、1件目は山に建てることになった。幸運にも、長野県木曽郡木祖村という木曽川の源流付近の土地を借りることができた。ログハウス風的小屋を建て、イワナ釣りやキノコ、山菜とり、野生生物観察、バーベキュー、スキー、登山と山遊びに夢中になった時期である。思い返せば、多くのレーザーセーラーが和歌山で開催されるワールドの出場権を目指して練習にレースに励んでいるとき、私は山遊びに呆けていたわけで、今では若干の後悔がある。

42歳の時、淡輪で全日本選手権があると聞き、学生時代を過ごした淡輪でのレースに出ようと思い立ち、久々に柳が崎で練習を始めることにした。私の公式レースの最後となったこの大会は、ゴールドフリーストに入らずシルバーフリーストのトップという形で最終日を迎え、折から悪化していた痔病のため最終日を棄権、結局は無風ノーレースとなったわけだが、これまた不本意な全日本となった。

以後、しばらくは柳が崎のメンバーも久しく私の姿を見ていなかったはずである。

○復帰、そしてBYCへ

長女やまみがヨットを始めた。「やまみ」の由来は、「山」と「海」、さすがに女子に漢字で「山海」はかわいそうとひらがなにしたものである。私は子供をヨットに乗せた記憶がない。それが高校に入学したときに、「私、ヨット部に入った」と報告があった。うれしかった。柳が崎への長女の送迎を口実に、これを機に私も復帰しようと思い、琵琶湖ヨット倶楽部に入会を許していただいた。2003年5月のことである。

こうして柳が崎通いが再開し、フリーストの域でのんびりとセーリングを楽しんでいたが、長女が受験モードに入り足が遠のくと、私も所属するジュニアバレーボールチームのコーチ業が忙しくなり、柳が崎から足が遠のくこととなった。以後、最近に至るまで、年に数回のセーリングとレース運営を手伝う程度の活動しかしてこなかったことは恐縮ものである。

○転機、そしてヨットへの回帰

この春、所属するジュニアバレーボールチームにおいて、若いコーチが台頭しチーム運営が軌道に乗り始めたことから、私も自分の生活の優先順位を見直すことにした。BYC設立90周年ということにも感化され、ヨット活動にも重心を移したいと考えた。EZ改修の手伝いも刺激になっている。

もう若くはないし、レース遠征といったことは想定していないが、もう少しヨットとつきあっていきたいと思う。

90 周年おめでとうございます

安田 寛



90 周年おめでとうございます。

私が初めて自分でヨットに乗った時の感動を、今でもはっきり覚えている。何も分からず楽しく乗っていた（23 歳ころ）ミニホッパー、シーホッパー、ヤマハ 21 C、X95、ヤマハ 28、と乗ってきた

21 C では竹生島廻航ナイトレースで柳が崎ハーバー沖 10 時スタート北湖に出るまではエリとの戦い竹島を見て竹生島を見えたとき北風 15 m 以上、だんだん吹き上がってきて竹生を廻航する大型艇のスピンの次々と破れていき、竹生回航してスピンアップで側フォアステに巻き付きメインダウンでジブのみで何度もブローチングをくらいながらマストが水面に入りデッキの窓まで水面がきたあ～このまま完沈する！何とか免れ無事に琵琶湖大橋が潜れるかが不安で何とか名鉄マリーナまで寄港できました。

2 人子供を琵琶湖ジュニアに入れてからヨットの知識、自然の怖さ、レース運営、頭の中ではトップセーラーです。



今年は 2012 ロンドンオリンピックイヤーでジュニアに入れた長男真之助（25 才）もレーザー級でキャンペーンをしていたが力及ばず参加出来ず、今年 1 年は鹿屋体育大学の職員です、次女千秋（21 才）は高校時代はレーザーラジアル級で立命館大学に入ってからスナイプに乗って今年は 4 回生で最後の年です。二人ともヨットは好きで社会に出ても続けて欲しい。

子供にも手が離れて、今年は長女里絵（26 才）に長女初孫（陽菜）が生まれ今年は孫も生まれ、あと 2 年で還暦です。

ぼちぼちヨットに乗ろうかな～

100 周年には倶楽部員増え活気のあるハーバーになるように願っています、またジュニアで孫を見てるかも！

安田 寛

創立 90 周年おめでとうございます

前島 啓人



沖の白石にて 2010年7月

このたびは創立 90 周年おめでとうございます。

この伝統あるヨット倶楽部に在籍し記念の節目を迎えられる事を大変光栄に思います。

琵琶湖ヨット倶楽部 創立 90 年の歴史の中には琵琶湖ヨットクラブ発展のために関係各位のご協力と先輩会員の皆様のご尽力のお蔭である事を改めて認識いたしております。

長い間に渡り築き上げられた偉大な足跡を振り返り心より敬意を表しお祝い申し上げます。

私は、2 人の息子と琵琶湖ジュニアクラブで小学生の頃から琵琶湖ヨット倶楽部の方に、色々な事をご指導して頂き、息子たちのジュニアの卒業後、倶楽部に入会させていただきました。

ヨットライフを楽しみ倶楽部を通じ、息子たちとも共通の趣味が出来、楽しませて頂き、何年か前に S A I L おおつに親子にてレースに参加、息子たちには 1 レースも前を走らしてもらった事無く大きく差を開けられるばかりですが良い思い出でしたが、このままではと思いその後、体力を付ける努力をしていますが、最近、ヨットにあまり乗らず、足も遠のいています、90 周年の式典を機会に活動していきたいと思っています。

のんびり楽しく、ヨット愛好家でいたいと思います。

今後も琵琶湖ヨットクラブ輝く歴史と伝統を益々発展と会員皆様のご健勝ご活躍をお祈りいたします。



Royal Varuna YC +

Andrew Kitchen



Royal Varuna yacht club Thailand
Presentation of BYC pennant to Commodore Alexander Skaria of the Royal Varuna YC.

BYC building international sailing friendships.

(Left to right) Gareth Owen, Commodore Alexander Skaria, Andy Kitchen (BYC).

I would like to take this opportunity to congratulate Commodore Hasegawa and the members of Biwako Yacht Club on their 90th anniversary. Founded in 1922, BYC is the oldest yacht racing club in Japan. It is a great honour and privilege to have been accepted as a member of this club with its long and prestigious history.

Having been introduced to sailing at the age of 12 in Toppers at Stoke Gabriel sailing club on the river Dart (UK), I graduated to the Europe at Paignton sailing club on the sea; BYC was the start of my Laser and lake sailing.

The complexity of Biwako's wind has often left me in a state of confusion but thanks to the kind and informed counsel of my club members I am gradually becoming familiar with her idiosyncrasies. The monthly fleet race with it's 6~8 races always gives the opportunity for a lucky start or shift and further hones the members' skills.

I am most grateful to BYC and the Japanese sailing fraternity for their kindness and support. Sailing in Japan has allowed me to meet a diverse group of people

from around the world, joined by a singular common bond, their love of sailing.

I wish you all fair breeze for the future.

Andy Kitchen





BYC CUP でのシーン

創立 90 周年おめでとうございます

信田 潤一



2005 ダブチックレガッタ

琵琶湖ヨット倶楽部創立 90 周年おめでとうございます。クラブ員として、90 周年を迎えることを光栄に思います。

私のヨットとの出会いは、大学におけるクラブ活動でのスナイプであります。その後、社会人となり会社勤めを始めてからはしばらくヨットから遠のき、結婚を機に、シーホッパーを個人で購入してセーリングを再開し、転勤で草津に来た際、友人から柳が崎ヨットハーバーを紹介されて、しばらくはファイアーボールを楽しんでいました。

シーホッパーが国体で採用されてから、柳が崎 YH に多くの方が練習に集まり、青木英明氏、秋山紀夫氏らと知り合いになりました。その縁もあり、兩名より当クラブにお誘いを受け、入会しました。国体にも大阪府代表として参加させて頂き、その後レーザーに乗り換えて、グアムでのパシフィック選手権にも出させてもらいました。

最近、レーザーのレースからも遠ざかりましたが、たまに、フリートレースを楽しんで満足しています。

また、西之園氏から譲り受けた P-34 を敦賀から淡路島の洲本まで 11 日間かけて回航し、クラブの由緒あるユングフラウの船名を譲り受け、現在、青木英明氏、本田氏、大西氏、西之園氏、青木昭氏と共にクルージングやフリートレースを楽しんでいます。

これからもみなさんと共にヨットライフを楽しく過ごしていきたいと思います。

信田潤一



BYC CUP



BYC CUP



BYC CUP



BYC CUP



鳴門海峡通過 2005年8月



サントピアマリーナ到着 2005年8月



大阪湾ダブルハンドレース参加 2007年10月

テザーワールド和歌山に参加

蜂須賀 弘美



12 年前に BYC の倶楽部艇のテザーで森君、奥村さんと私の 3 人で、浜名湖で行われたテザーワールドエントリーして当時 JSAF のお偉いさんだった秋山君のお父様から「レディースヘルム賞」をいただいたことがあったのですがそれ以後は骨折でヨットにほとんど乗っていないし、BYC のテザーはもう秋山君と森君がそれぞれクルーを見つけて出場するとのことでした。

私はテザーは 12 年ぶりだし、お元気とはいえ 69 才のお年寄りの方を乗せてしかもワールドという大きなレースに出るのはかなり不安。。そこで、30 年ほど前にイギリスでのレーザワールドと一緒に行ってからの和歌山の友達、岩出さんに声をかけてみました。岩出さんは J24 の全日本で何度も優勝し、J24 ワールドにも行っていたらしいけど声をかけた時は親の介護が終わっ

たばかりで、しばらくヨットから遠ざかっていたそうで 3 人のデコボコトリオの練習は、和歌山に長野さんのテザーを持ち込んで始まり途中でイギリスのレーザワールドと一緒にいった青森の長津さんに電話したら「なんだか面白そうだね～。僕も出たい～」って話が弾んでまたすぐにヨットのお友達の輪が広がって戻ってきました。

結局、和歌山でのテザーワールドに琵琶湖からは 4 艇参加。ワールドのレース期間中は、レイデイまでもがほとんど中～強風シリーズだったけどレース期間中毎晩「反省会」と言うか飲み会やパーティーもすごく楽しく盛り上がったし、ワールドでは全部で 78 艇中、秋山チームは 7 位、蜂須賀チームは 11 位、森チームは 42 位、片山チームは 72 位と言うなかなかの成績でそれぞれに



楽しい思い出が出来ました。

私はその後中古のテーザーを岩出さんと共同で購入し今年で25年ぶりに上野さんと一緒に乗ってテーザー西日本選手権にも参加。テーザーで西日本選手権や全日本へ

クルーザーで徳島の阿波踊りヨットレース（2年連続優勝！）などにも遠征して時間の都合さえあれば週末に和歌山まで出かけて行ってテーザーやクルーザーに乗っている人達と和気あいあいとヨットを楽しんでいます。

仕事が忙しかったり、親だけでなく自分も年をとってあんまり無茶なことも出来なくなってきたけど、いろんなことを陰で支えてくれる人たちがいてこうしてヨットに乗れる機会がまたあって一緒に乗ってくれる友達がいてすごく楽しい時を過ごせるのはありがたいことです。



良い風が吹き、水が綺麗な海で、空気も魚もラーメンも美味しい和歌山でテーザーやクルーザーに乗ってみたいと思うことがありましたらどうぞ遠慮なく連絡をください。

BYC 和歌山支部（?!） 蜂須賀弘美



禍福はあざなえるシートのごとし、
浮き沈みのヨットと人生

上野 美子



戦後開催された、第1回国民体育大会のヨット競技は、柳ヶ崎沖での開催だったそうである。

その国体に絡めて。

1980年夏、私は大学から始めたヨット部の3回生、4回生が引退し、代替わりしたところ。とにかく、レースに出たくて直近のレースにエントリー、京都府の国体予選だった。

ずっと先輩のクルー。インカレ予選が終わり、やっとティラーを握り始めたころ。スキッパーの経験はと言えば、先輩が練習に参加できない時に、レース練習に参加する程度。クルーは、唯一の後輩女子部員、春に入ったばかりでほとんどセーリングしたことのない新入生。

レースには、当時、少ないといえども、男子部員と伍してセーリングしていた他の大学の女子セイラーたちもエントリーしていた。

先達の胸を借りるつもりで、見よう見まねで、ついていき、なんとかセーリング。順位やポイントも分からず、終わってみたら「優勝」ということになっていた。

クルーをしてくれた新入部員が一緒に行ってくれるので、何事も経験と国体参加。

「国体セイラー」である

第35回大会の開催県栃木は、海がないため千葉県・稲毛にて行われた。海でのセーリングも、遠征も初めて。

そうそう、うまいことが続くはずはない。

長距離の遠征、ほとんど初めての本格的なレースでのスキッパー、うねりと、強風。あえなく撃沈。レベルの高い京都代表の名に、はずかしい汚点を刻む。左から二人目。控えめに。



そもそもなぜヨット部に入ったのか、

- 1、「クラブ」というものに入ったことがなかったので、「スポ根」を体験するのもいいかなあ。
 - 2、なぜ風上に向かって進めるのかも知らないけど、「ヨットやっています」というのがかって良さそう。
 - 3、他のスポーツは個人でも出来そうだけどヨットは一人では無理そう。
- というのが理由。軽薄、何も考えていない。

無風で練習の風待ちのあいだ、初めてヨットに乗ったのが、柳ヶ崎沖だった。

当時は、関西でも女子セイラーの連盟を立ち上げようかという時期で、これまた訳が分からず参加した会合で、女子セイラーの草分けの女性に声をかけてもらった。印象的だったのは、

- 1、苗字の漢字が逆やね。
 - 2、男子部員と対等に扱ってもらっている？
- であった。

入学した年にインカレ全国制覇した大学のヨット部、噂では、「女子部員は辞めさせられた」とか、レースで上位の大学の選手のたまたま前を走っていて、マーク回航をもたもたしてたら、「遊びでやってるんじゃないぞ!」と、怒鳴られたり。(「えっ、遊びでしょ。」って思いましたが。)

私の大学では、初の女子部員だったので、先輩たちも



1994 Laser Womwns World



2011 BYC CUP

扱い方が分からず、力仕事も合宿の食事当番も男子部員と対等に扱われた。

対等どころか、沈をしても先輩に先んじてセンターボードに、ちやっかり乗っていた。幸い、(先輩にとっては、災い?)であった。先輩に泳がせて、ちやっかりセンターにつかまる。

卒業後、社会に出てそれまで意識しなかった「ジェンダー」「年功序列」の「波」にもまれ、再び、「自由な」セーリングをしたくなる。



気楽なシングルハンドのレーザーに乗る。良くも悪くも結果は、自分のせい。性にあっている。

左から、私、奥村さん、マリット、野上さん

最初に参加した全日本選手権に来ていたワールドチャンピオン、スウェーデンのマリット・ソ・ダストローム。転戦しながら、日本に数ヶ月滞在していた。後のソウルオリンピック 470 級の銀メダリストである。トップセーラーでも、レースや異国の文化を楽しんでいた。だからこそそのトップセーラーなのかも。

そんな盛り上がりもあって、レーザー 2 年目で、スウェーデンで開催された世界選手権に参加。クオリファイが熾烈なメンズと違って、競技人口の少ないウィメンズは、手を上げれば参加できた。

「ワールドセーラー」である。

北欧、白夜。真夏のレースなのにドライスーツ。強者のワールドセーラー達に対しても、出艇禁止の日が続く異例の強風。最終日ようやく風が落ち出艇許可。

が、出艇時ビーチで波に巻かれてデスマスト、セールが真っ二つ。またもや、撃沈。

ウィメンズワールドがメンズと同時開催、ウィメンズもスタンダードリグで行われていた大会だった。

ヨットをやって学んだこと、大きな目で見て、今するべきベストなことをするという考え方。

ヨットの気に入っているところ、たまーに乗っても風のおかげでいいところ、それこそ、オリンピックメダリストより前を走れたりする。まだまだ捨てたものではないと、勘違い。これがあるからやめられません。

社会人になって拠点としていた西宮フリースの移転に伴い、昔懐かしい柳が崎に移って来て久しい。

最近、禍もなく、福もなく、湖に浮かぶ機会もめっきり減った。また、そろそろシートを繰り出したい。

とまあ下らない話して、格調高い、伝統ある BYC の 90 年記念誌に、また、汚点を残すことになってしまった。

禍福は続く・・・・。



BYC 90 周年に寄せて 小松原 賢治



滋賀に来て、びわ湖に始めて訪れた時がヨットとの出会いであった。

その出会い以来、ヨットを楽しむ日々が続いている。

今の艇庫になる前は、円形をした屋根で覆われた艇庫で、艇庫の前には管理のおじさんとお婆さんがいて、昼食はお婆ちゃんが作る焼きそば、お好み焼きを購入したり、カップラーメンで、お腹を満たしていた。

その艇庫も改修され今の艇庫になり、コンビニエンスストアや飲食店が増え昼食は様変わりした。といっても、焼きそばやカップラーメンを食べることには変わらないのだが ...

昨年より BYC の会員になり、一段と楽しいヨットラ

イフが始まった。

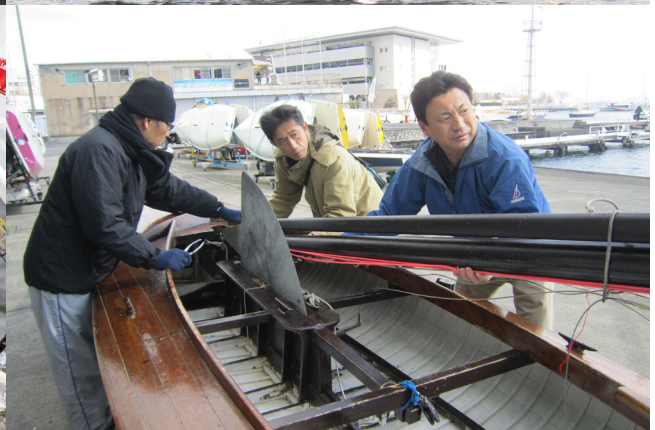
春は海津大崎に花見に行き、毎月行われるフリートレースに一喜一憂し、日本各地の大会や海外まで遠征に行き、レースと親睦を楽しむ仲間達。

そんな素敵なヨット仲間が集う BYC。

その BYC は多くの思い出が詰まり、今年で 90 周年。

これからもヨット仲間が集う場所であり続ける BYC。

人、艇、艇庫と、日々刻々変わる風に一喜一憂し、歩み続ける。



BYC に入会して 鳥居 貴彦



僕がヨットを始めたのは5年前、大学の部活動としてでした。地方の大学であったこともあり、のんびりとした雰囲気の中で活動をしてきました。

平日に授業をさぼってハーバーに向かい、ハーバーから直線で50キロほどの所にある観光地の砂浜まで延々とアビームで帆走し、観光客に好奇の眼を向けられたり、強風のなか中学生用においてあったOPでこっそり出艇してマストを折りかけたりと、決して真面目なセーラーとは言い難いヨットとの付き合いをしてきました。

そんな僕がこの春から縁あってBYCの一員にさせていただけることとなり、90周年というとても長い歴史と、先輩方の偉大な業績の数々にただただ恐縮してお

ります。

今は、レースやEZの整備を一緒にさせていただき、これまでの活動とは一味違ったヨットの楽しみ方と、セーリングの奥深さにわくわくしています。



ヨットの思い出とBYC

山本 亮平



BYC CUP にて

私とヨットの出会いは小学生の頃でした。あるきっかけで父の知り合いがやっていたヨットスクールに行き、そこで初めて乗ったヨットの楽しさに魅せられて、即ヨットスクールに入りました。ですが、思えば楽しかったのはその時までだったように思います。そのヨットスクールのトレーニングは非常にハードだった上に私はスクールの中では下手な部類でした。更に一緒にヨットを習っていた他のメンバーとも気が合わなかったため、下手なことを馬鹿にされ、軽いイジメにも遭っていました。

それでも「負けたままで終われない」という意地で続けていたのですが、結局4年ほどで辞めてしまいました。ヨットを習ったことで精神力は鍛えられましたし、確かに得るものも多かったのですが、今にして思うと子供の頃の私は初めてヨットに乗った時に感じた楽しさや爽快感を忘れていたように思います。

それから十年以上の時間が過ぎ、私はヨットと関わりの無い時間を過ごしていたのですが、その間も何故か無性にヨットに乗りたくなる衝動を感じることもありました。私にとってヨットは良い思い出の無いものだったはずなのに、何故そうなるのか自分でも不思議に思ったのですが、私の心はヨットに乗る楽しさを忘れていなかったようです。

そんなある日、私が就職した時に新入社員研修でお世話になった部署の部長さんが琵琶湖ヨットクラブの副会長の青木さんでした。そして、ちょっとした雑談から私が昔ヨットをやっており、いつかまたやりたいと考えていたということを伝えたところ、是非来なさいと誘って頂きました。

そして本当に久しぶりにヨットに乗るようになったのですが、OP級しか経験の無い私には分からないことも

多く、乗っていると肉体的、精神的にしんどいことが多かったです。ですが、楽しいときは本当に楽しいですし、波や風の刺激が生きていることを実感させてくれます。青木さんや他の皆さんも親切にしてくれますので、子供の頃に忘れていたヨットの楽しさを今実感できるということをととても嬉しく思っています。

そんな私も昨年結婚し、実はもうすぐ息子が生まれそうです。いつか、私の息子がヨットに乗るようになる日が来るかもしれませんが、その時はヨットにのる楽しさを忘れないようにしてあげるつもりです。あと、まだ私は下手なので、格好悪いところを見せないようにもう少し上手くなっておきたいですね。

最後になりますが、琵琶湖ヨットクラブが90周年を迎えますことをお祝い申し上げます。そして、そんな歴史あるヨットクラブのメンバーとして活動できていることをとても光栄に思います。皆様、今後ともよろしくお願い致します。

